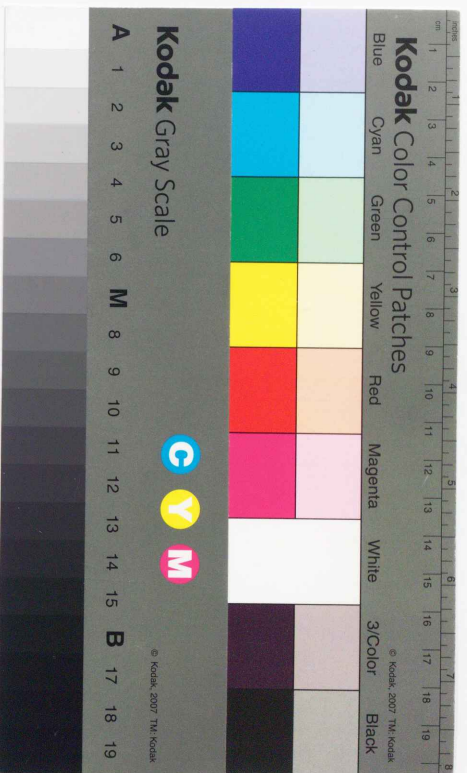




かかみかはらの

むかし

各務原市

高齢者大学院

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

博士の足跡

郷土の民話

旧各務村各務(各務原市各務)の 雨乞とお礼の雨踊り.....	1
小佐野町における片羽屋敷の由来.....	2
地藏尊まつり.....	3
地藏まつり.....	5

農土の足音

昭和十一年七月

小笠原村に於ける農土の足音

昭和十一年七月

小笠原村に於ける農土の足音

旧各務村各務(各務原市各務)の

雨乞とお礼の雨踊り



旧各務村と旧須衛村が明治三十年に合併して新しい各務村になったので、今から七十八年前ころは両地区のいろいろな祭り行事などは別々に行なわれたとか、この雨乞もその一つであった。

各務村は三方山にかこまれた農村で、米、麦、養蚕が生活の柱であった。ところがかんがい用水といえどが瀬池の水と山から谷川で流れる水だけ。それで夏、日照りが続くど畑作物はもちろん水田も水不足で乾いて亀裂ができ、收穫皆無、かんばつにさらされることかたびたびであった。そこで神様に助力を祈るのがこの雨乞である。

各務は東組、中組、西組の三部落になり各家で長さ一間、直径五、六寸位の松明を作り相当重いものを担いておが瀬池の東の天野山に登り、部落ごとに一列に全山峰筋に散解し、夕闇を待って、合図によって一斉に点火しておが瀬池の祭神に楚雨を乞うのであります。

二、三時間でありますが、夏の夜空に一列に見える火の列は見事なもので、母と夕涼みしながら見たものでした。二、三日して雨(夕立)が降って相当な雨量であるど「お湿めり遊び」といって太鼓がなり、村中仕事を休み、大雨があるど日をきめて部落のお宮様から村の氏神様へ各自竹を組み合せた花笠を作り、浴衣姿で太鼓や力ネに合せて行列でお詣りし、広場で円陣をつくっておどった。子供

達も行列について歩きました。本当に子供時代のなつかしい思い出であります。

小佐野町における片羽屋敷の由来

昔から我が小佐野邑（ムラ）に片羽という俗称があります。当時はほんの数軒あったのですが、それは徳川幕府初期の三井川中流にあたる当地一帯によしが生い茂り、川の土堤はもちろん田の畦にも生えておったのです。

今から十四・五年程前から土地改良で整地され全く見当りませんでした、どこかに残存していかと私が綿密に探したところ、わずかにその痕跡をとどめている一茎を発見、保管しているような状態です。

当時は清水が数ヶ所に混々と湧き出て、夏は冷たく、西瓜や瓜を冷やしたり、冬は暖かいので洗濯をしたりして調法がっておりました。

生い茂るにまかせていたのでウナギやナマズなど魚類の繁殖地でもあったのです。

また、そのよしが片一方に葉が出ている珍らしい種類で、普通はたがいちがい双生の葉があるのですが、どういうわけか一方だけに葉がある学術的にも価値ある珍種です。それでその附近を片羽といい、その数軒を片羽屋敷と呼ぶようになり、それに連なる田畑一帯を片羽西という俗称が今も

引き継がれております。

また、このよしは他に類がないので中仙道を歩いて通る当時の旅人が、聞き出してわざわざ道寄りをして眺め、土産に折って持参したという話もあります。現在ほとんど絶滅の状態です。以上片羽屋敷の由来を書きとめて後世に残したいと思い拙筆をとった訳です。

地藏尊まつり



昔、賤しい女の人が地藏尊を信仰していました。そのうち男の子が生まれ、四才になった時にふとした病にて伏していました。その時、夫にこの子が小さいので可愛想だから後妻を迎えないようにといった頼み、涙ながらに亡くなりました。そして一年を過ぎると凡夫の身の情なく、程なく後妻を迎えました。

次第にその子供を憎しみはじめて事毎につらく当りました。ある日のこと、吉日に使う酒を作ろうと、米を浸して釜にこしきを仕掛けて買物に出て行き、帰って見ると先程の米を手ですくい取られていたので子供をせっかんしました。両手を合せて「赦して下さい。」と地藏尊と亡き母の位牌の前であやまりましたが、継母は腹を立て、どころかまわす打ち、それにあきず、引きつりこしきの中に押しこめ、その上に蓋をして大きな石をのせて火を仕掛けました。釜の水は熱湯し、沸き上り、入熱地

獄の如くになりました。その時、夫は胸騒ぎがして急いでわが家に帰って見ると、我が子がどこにもいないので、泣き叫ぶ声のする方に耳を立て近寄ってみますと、血潮を分けた我が子の声。狂気の如く駆け寄って見れば、一人の旅僧が自分の子供を背負って立っておられました。夫は怪しみながらその始末を尋ねると、

『お前の子供は、継母のため蒸し殺されむとせり、余は身代りをもって救い来れるなり。余が一子を他家に預けて養育せむことを誓わば、背の子を返すべし』

夫は涙を流して厚く御礼を述べ、我が子を手に引き抱えました。

「御僧はどここの御坊なりや」と、尋ねますと「余は蔵玉院の傍に住めり」と、姿は煙の如く消え去りました。

妻は夫の不意の帰りに恐れて顔色は青ざめて、あわてふためいて火を消しました。夫は知らぬ顔で、我が子はどこに行ったのかと尋ねると、外にでも遊びに行ったと答え、ふと夫の顔を見ると家にまつてある地藏尊のお顔に見えて、ハット胸をつかれて、我が身の仕打ちの空恐しくなり、さん悔の念にいたたまれず、ころびつつ彼方に走り行き、川の深みに身を投じて死にました。

夫は前の妻が信仰していた地藏尊のお除を「ああ、ありがたや」と声を惜しまず泣きました。このさまたまの伝えを聞き、四方の人々が集まり、参拝者の断つことなく、香のたえることなしてあった。その後自分は出家して地藏尊の行人となり、毎日花や仏飯をお供えして煙のたえることなく、毎年七月の二十四日と二十五日は子供も大人老若男女の別なく、夕方六時から十一時までおどりをして、

その堂を慰め、両側には小さい店が沢山並んで賑やかに地藏尊祭りが行われます。今は五年ほど前に新しい御堂が建てられて、その中に安置されています。

地藏まつり

△その一▽

それは昔々、私達の小さい頃の思い出話でございます。

私の家の近くに辻堂があって、お地藏様がまつてありました。暑い暑い八月の二十四日がお祭りに当たっていたようです。この祭りは夜のいわゆる夏祭りでした。

昼のうちに地藏堂には果物やお菓子やお餅などが山のようにお供えしてありました。そして近くの杉の木から椿の木まで縄を張り、紅白のほうづき提灯が四五十個もさげられ、昼間から飾りたててありました。

私達子供心に早く夜が来ればいいなと思いつながら、どこからともなく沢山の子供が集まって来ました。あちらでは縄飛び、こちらではお手玉遊びと、子供たちがたむろしてお祭り気分を充分味わっていたものです。

さて夜になりますと、今日ばかりは早目に夕食をすませて浴衣に着変えた子供達は、目をかがやか

せ、生き生きとして集まって来ます。もうその頃には地藏堂の前の「南無地藏菩薩」と書いた大提灯には、赤々と灯が入り、大人の人達が大勢来て高く張った「ほうずき提灯」の縄をゆるめて次々に灯をともしていきます。あたりは、バツと明るくなり、紅白の提灯が風にゆれ動くありさまは夏祭りならではの風情でした。

やがてカラン、カランと甲高くカンカラ太鼓を合図に流経が始まります。そして流経が終るのを待って子供達は一列に並んでお供えをいただきます。それが子供達にとって何よりの喜びだったようです。

一人来た子、友達と来た子、お母さんと来た子などさまざまで、みんなが帰る頃には提灯の火も消えて後には星だけがまたたく暗い暗い夜でした。でも子供たちにとって今日一日はかけがえのない楽しい一日でした。

△その二▽

私がこちらに嫁入って来ました頃、やはりこちらにも地藏盆といって、お祭りのしきたりがありました。今から四十四、五年程も前のことですが、私の子供達も小学校に入ると仲間に入れてもらったものです。

「山の子様」は男子だけのものですが、このお地藏様の祭りは男女共同のもので、子供たちにとって楽しいものの一つでした。先ずお祭りの前日、子供たちは自分の町内を「お地藏様の芳願」と呼び

ながら家々を廻り、その頃のことですから二、三十銭ずつもらってきたものです。それを翌日宿元を持ちよって上級生が買物の相談をします。当日は昼食をみんな食べて宿元のお母さんも相談に加わり、ご馳走や買物などのアドバースをします。

お地藏様はお宮の一隅に台石ともに五、六十センチメートル位の石仏でひっそりと立っていました。当日子供達は廻りの草を引いたり、小笹を刈ったりして初めてお地藏様の顔をおがむ位のものでした。両側の花筒に花が飾られ、一応掃除がすむと宿元で出来た小豆御飯を供えて一回お詣りするのです。

いよいよ昼食ですがこれ又大変なもので、宿元は朝からひっくり返るような大騒ぎです。御馳走といつて昔のことですから、小豆ご飯か味噌飯などに季節の南瓜か茄子の煮物に胡瓜の酢もみぐらいですが、子供たちはみんな何べんもおかわりをして、おなか一杯になるまで食べました。食後は大きい子供たちがお菓子分けたり西瓜を切ったりして小さい子をいたわりました。

今から考えるとなんの変態もない一日ですが、子供達には無上にくれしく楽しい行事のようでした。こんなところにも小さい者同志の心のふれあいや心の和があり、又長幼の序を学び、礼儀作法も知らず知らずのうちに身につけたものです。

ここに記しました地藏祭りの△その一▽△その二▽のような僅しも今日ではすっかり影をひそめて、現代の子たちはなんだか味気なく可愛想なような気がします。幼ない時の思い出やお話はいつまでも忘れるものではありません。その人々の一生をどんなに心温かくさえてくれることでしよう。

行事

正月の行事.....	9
初 午.....	11
左 義 長.....	11
左義長の神事について.....	12
左 義 長.....	14
雛まつり.....	14
お盆の行事.....	15
御 仏 事.....	17
八日ぶきのこと.....	19

正月の行事

歳末の十日といつて、昔から年中で一番忙がしい時である。昔は十二月末になつても、なかなか秋のもみ摺りが片付かなかつたので旧正月だった。

旧十二月二十五、六日に煤掃きをする。長い竹の先に藁と笹を付いて、屋根裏の煤を払った。二十七日、八日に餅をつく。朝二時頃に起きて、きび餅、栗餅、白餅と、一依ぐらゐは搗きよった。餅搗きやすむと、父は山へ門松を切りに行った。二十九日の夜注連縄を作ります。藁を打たずに手に水を使つて作る。

母は年越魚を作る。(おせち料理) 黒豆、数の子、田作り、切昆布、大根の裂き干し、いも、ごぼう、豆腐を入れて煮る。子供は風呂たきや、掃除を手伝う。大晦日は早く夕飯をすまし、夜は年越そ

ばを食べました。

元日は朝二時に起きて、つるべ井戸で若水を汲んで顔を洗う。父と一しよにお詣りできる男の子は、貼りたての上駄付の提灯をどもして詣って来るまでは、誰にも口を聞かずに語る。向いの山の権現様、秋葉様、山神様、御嶽様、氏神様、お寺を詣って来ると、約一時間半かかります。母は帰る時間を見て、餅、いも、菜を入れて餅を煮る。まだ夜が明けぬうちに雑煮を食べる。父はお酒が嫌だったのでお屠蘇は呑まなかった。母と子供は、朝明るくなってからお詣りしました。

子供は、楽しい嬉しいお正月。新しい着物、足袋、下駄を履いて、コマを廻したり、追羽子ついたり、歌留多を取って遊んだ幼き日の思い出がよみがえってきます。

七日は七種がゆといつて、かゆの中へ、餅、菜を入れて食べます。十四日は小豆がゆの中へ、餅、干柿を入れて年越がゆといつて年神様に供える。それから年神様の棚をおろして、注連縄の中へ小豆がゆを入れ左義長をやる。「左義長や、どん、どん、餅のかけあぶれ」書き初めを燃やし高く上ると字が上手になるといつて喜んだ。餅を焼いて食べると無病息災と言った。門松の燃え残りを屋根へ上げておくど雷が落ちぬといった。

門松も取れ左義長がすむと松の内も終り、田舎も急に淋しくなった。

二十日は恵比寿様のお正月といつて、大豆をいり御飯に入れて炊く。大根を付いてゆで、それを味噌、胡麻で和え大根よこしを作つて御飯と一しよに供えます。

大体正月の行事はこの位だったと思います。遠い昔を振り返り、自分の脳裡に浮んだ事を思い出して綴りました。

初 午

正月過ぎて初めての丙午の日を初午といい、午の日の六十日目にあります。私の方では稲荷神社のお祭りの日に一緒にします。宮当番の家で前の日に米の粉をねって、まゆの形のだんごや、すずの形を作つて、ささにつけ、当日餅投げの棚にたくさん付けておく。一方木の札をささの数だけ作り餅と一緒に投げ、札を拾ったものがささと交換する。昔はそのささをかついて、よろこんで家へ帰ったものです。終戦過ぎは、蚤もかわなくなつたから、段々略式になり、今では神主様の御祈祷があり紅白のお餅を投げるだけになりました。

左 義 長

私の村は昔から毎年一月十五日には野村神明神社の境内で、朝十時より各家から一人ずつ蓑を持つて集まります。その蓑で大きな孔雀を作ります。その孔雀の羽根の先にみかんを刺して、きれいに飾

りつけ出来上ります。そのからだに、青竹の割ったのを刺して、倒れないように四方八方から皆で支えて持ちます。長さは四米余りあるそのまわりには、松や、しめ縄、古い神様の御札、書初め等をつけて、十二時になると一度に火をつけます。次第に燃えて行くと青竹が大きな音を立ててはぜます。その音には驚きます。そのはぜた青竹を各自一本ずつ土に投げつけると又はぜます。その竹の真中の割れたところに四角の二十センチメートル程、厚さ三センチメートルの餅をはさんで火の上にのせて表裏と焼きます。その黒く焼けた餅を手でちぎり食べます。その餅を食べると夏に病気にならないという事です。

二時頃終って風呂敷に包み背中に負ぶって帰ります。寒い日でも焼いた餅の匂い竹の油で美味しいものです。その孔雀の倒れた方向によって、その年の豊作不作がわかるといい伝えています。幼い頃からのなつかしい一つの行事だと思います。

左義長の神事について

戦国時代の戦いはその戦線が大きくなるにつれて、笛や太鼓ではその号令は聞かされない。徹底しない場合が多いのでノロシをあげてこれが徹底を図った。

伝承されている地域の年中行事の中でも左義長は一番に早く行なわれて、陰暦の十五日正月の前日

の十四日の日没頃に一定の集落の人が、地域の氏神様に豊年万作に禍を去って、健康を祈りて、葉、撒去した門松・去年の神符・しめ縄等と青竹を持ち寄って、青竹を割って大きな束に固くしばって立て、火を放ち燃えあがると同時に恵の方へ倒すのである。

燃えあがったとき、子供達はお正月の書初めを細く切って煙の力で高く舞い昇らせて、字の上手になるように祈り、大人はお正月についた餅を焼いて各々自宅に持ち帰り、家内一同わけあってこれをしたまきます。また、燃え余りの青竹を一本持ちかえって、初午ダンゴを造るときこれをクドにたいて養蚕の豊穰を祈るといふ年の始めの行事である。

戦場で傷ついたり病氣のために帰農している人等と土着の人が、その地域が連帯して左義長の聖火を神様に御馳走し、一般地域の住人には神仏に祈願をこめるノロシでもある。

これが行事に加わったものは、炎のおさまる頃、神酒とスルメをいただいて帰るが、残火は沢山あるのでそのとき参加できない人達は随時お詣りして残火にあたって健康を祈る人も多い。

この行事は地域の氏神を中心に行なわれるが、近くでは羽島の福寿町付近、遠くは九州の大分付近においては左義長祭りて観光の名所ともいわれている。

左義長 ドンド 餅のカケアブレ

左義長 ドンド 餅のカケアブレ

左 義 長

毎年左義長は一月十四日です。代り番に毎年宮当番がきめてありますから、十時頃から出て太いもうそう竹をしんに立て、それに青竹や神社の門松を立てかけ、所々に藁を立てかけ、上の方から八番線と縄でぐるぐる巻く。一時頃火を付け、元日の初水で二日の書き初めに書いた紙を火のまえ盛りの上に方へあげる。高くあがると字が上手になると云いました。また、昔は毎年たおす方向がきまっていたそうです。大分火がおさまった二時頃からお餅をやく。餅に灰を付けて食べると夏病みをしないということですが、もえ木をもらって来て屋根のひさしにはより上げておくとか、かみなりが落ちないともいいました。又もえ木は、あくる日の十五日正月に薪と一緒にたきました。

雛 ま つ り



昔は子供にとって一番楽しかったのは、ひな祭りでした。花は庭にあった紅白の源平桃の枝を立て今のうちに白酒はなく、甘酒を供え、たくさん飲んでフラフラしたこともありました。また、正月

の餅をつく時に、あられを作ってもらい、それをいつて供える。近所の子供達が前掛の角を折って、『おっと、おっか、豆おくれ。おっと、おっか、豆おくれ。』と云ってもらってあるいたものです。雛壇でも今のような揃ったセットはないから大きな箱入りで、あららの親戚から内裏様とお姫様、こちらの親戚から垣汲人形、また、外から日本人形、一寸した知り合い等は土の素焼きに色の付いたような七福神や、福助、だるま等いただき、いろいろ並べたものです。

飾るのは早くてもよいが、三日が過ぎたら片付けないと先れ残りになると云うことですが、片付けることがおしくて一日のばしになるものです。

お 盆 の 行 事

八月十三日、祖先の霊を迎えるため朝、朝、仏壇から位牌を出して、奇麗に拭き座敷の床の間にゴザを敷いて壇を作る。そこへ位牌を並べてお精霊様を飾ります。供花をしてお供えは西瓜、素焼、菓子など供え夜は餛飩餅を供えます。

縁先に岐阜提灯を点して、いかにも田舎のお盆らしい風景になる。門辺に出て、麻穀木を家人が集まってたき、お墓にお詣りして、提灯を点して迎え火をします。

十四日、朝早くからお寺へお詣りします。朝は生餅、昼は四膳といって、薄板のお膳に麻木の箸で、

御飯、胡瓜の酢もみ、丸あげ、味噌汁、夜はゆてた素麺を供えた。

十五日、お寺にお施餓鬼が務まりお詣りします。朝だんご、昼は四膳、御飯、ひょう菜のお和え、南瓜芋、味噌汁、夜はおかゆを供え、夜遅くお立の粉茶を供えて送る準備にかかります。花立の前に供えたものは一さい精霊様といって、全部芋の葉に包んで、精霊舟を作って、その中へ杖にと十六さきぎを一しょに入れ、冥土へ土産にと、味噌、山しょうを豆の葉に包んで入れ、門辺で送り火をたいてから、線香、提灯を点して川へ送り出します。

昔の人の聞き伝えに、お精霊様に使ったはして、体の痛む所をなでて川へ流すと健康になるといつてやりよった。盆がすんでお精霊様が冥土へ帰る時、地獄と極楽の別れ道で、鬼が土産を持って来たかというので、山しょうと味噌をやると、鬼はそれを食べて、辛い辛いと言っている内に極楽へ行つたげな、子供心にこんな話も聞いております。

十六日、山狩といって、京都の大文字山のようなこともやりました。子供が十二日頃から、竹、藁、夷藁、縄など家々で貰って、大きな松明や小さい松明を作る。大きい松明は山の頂上へ持って行き、下部落は、「への字」上部落は、「鍋づる」の形に並べて一斉に燃します。

黒い山の頂上に火が点されて、見る間にへの字、鍋づるが火となって浮き出し美しく燃えつづける時は、大勢の見物人もいて、街道を通る人の目を惹き止めて止めた。

笛、太鼓、力ネを道化拍子で吹き鳴らし、大きい子供は手に松明を点して山から降りて来る。小さい子供も松明を点して迎えに行き、途中で出合ってから互いに松明を廻し廻して帰ってくる。手火花が

できてからは、一層美しく賑やかになり、男の子供の一番楽しい行事でした。山狩はお盆の送り火といっていた。

お盆の行事も大体こんなことだったと思います。大東亜戦争が始まって以来こんな風景は見られなくなつた。文明の世の中になり、今はお精霊様も自家用車で川へ送るようになった。

過ぎし日の見た事、聞いた事、行なつた事の思い出を端ない筆にまかせて綴ってみました。

御 仏 事

「勿体なや、祖師は、紙子の九十年」

これは親覺様が、紙の着物を着て御苦勞なさつた一代をお慕ひして就まれたおうたです。

お仏事は十一月二十八日から一週間行われますお寺の行事で、普通にいう報恩講です。お寺の都合によって、その前後幾日かがあてられます。

大正から昭和のはじめにかけての頃、この時期になりますと、どこのお寺は何日から報恩講だ、村の報恩講は一週間後だ、雪が降らねばよいがと。

青年会の人々は、毎夜読経の助員につくたためにお経の練習をしています。

報恩講の始めの日には、「おどき」があります。おどき米や、初穂料を持ってお参りします。子供

は母親や祖父母について、おどきにつくのは嬉しいものでした。

お給仕は青年会の方々と、着物、羽織の姿でした。

二日、三日目には、一同助員につく読経、住職の御伝しよう拝読、布教師の説教があります。

布教師は、西は九州から東北まで、広い範囲での実話とか、見た事、聞いた事を、「おたどえ」にしてお話になります。

面白いこともあり、悲しくて涙ぐむこともあります。それが仏教の教えにつながっていますので聞く人も真剣で、広い御堂もしーんとして来ます。

お嫁さんも嫁いだ娘さんも子供達で、在所の御仏事に参ります。家の中までお仏事様で急に賑わしく忙しくなります。

最後の日の登満座、御満座には広い御堂も座る場所もないくらい一杯の参詣者です。山門前には露店も並ぶといったふうです。

今も報恩講は続いています。が、お参りする人はずいぶん少なくなり、若い人の姿は余り見られず、年取った人が殆どの方です。でも昔に変わってお給仕から、お手伝いして下さいます。方々、助員におつきになる方々は皆家庭のお母さんたちばかりです。

お寺でのおつき合いが多くなりますばかりでなく、親鸞聖人の御遺徳をお慕いしてお参りする人が段々とふえ、昔のような御仏事になるのも遠くはないでしょう。

八日ぶきのこと

素朴な庶民の生活は極めて単純で自然にすがり自然を愛し、自然を信ずることを年中行事に取り入れて、それを楽しみはぐくみ育ててきたのでしょう。

八日ぶきというもその現われの一端かと存じます。旧暦十二月八日は豆腐を買ってきて、それを醤油で味付けをし、お汁にして夕食に家内揃って御馳走になったものです。

なぜ十二月八日を選んだかは分りませんが、この前後はこがらしの季節ですがたまには穏かな日があるものです。それで風が少しも吹かぬ日は来年は世の中が悪いとか、世柄がよくないとかといって熱い豆腐汁をふいて食すように、風を人工的に起して世柄を良くするように努力するというのです。勿論、最初の一晚は神様にお供えて、世の中の無事平穏を祈って、我々はその余りをおしよう判に合ったもので、当時は生活程度が低いので豆腐、あげ、煮干等は唯一の御馳走でしたので、そういう信仰にかこつけて行ったのではないでしょう。

なお、豆腐に耳のある部分を買った場合はその家は大変縁起がよいとかといっただけです。当時の今の豆腐の倍ぐらいあって一つの箱に八本取りといっただけに八本に切ったものです。それで耳つきという四本は耳のないのできるので。一本の代金は六銭でした。一般の家庭では当日に限

り一本買うのですが普通の日は半分買ってきました。その半分を一丁と呼んでいました。今はどの家庭もそれを行なう家はありません。

私は明治三十六年生まれてですが子供の頃は小佐野には店はありませんでした。それでお勝手の買物は井下田前か三井まで行ったものです。

いかに生活程度が低く自給自足の社会の昨今であつたかがい知ることができます。

あそび

縄とびあそび	21
石けりあそび	23
陣とりあそび	25
植物であそぶもの	27
男児のあそび	29
昔の子供のあそび	31

縄とびあそび



- 一、縄 — 藁の縄や、細引きといって麻であんだ紐を使ったりした。自分のとびよい長さに切って、両端がはどけないようにこぶ結びをしておく。それが「握り」になる。
- 二、遊び場所 — 家の前の道路、寺の庭、校庭などであつて、学校では休憩時間に縄とびをして、授業が始まると下駄箱へ履物と一緒に押し込んでおいた。
- 三、遊び方

(1) 一人とび

- ① 前まわし — 両端を左右の手で握って前にまわしてとぶ。別の一人が這入って一緒にとぶこともある。
- ② 後まわし — 後にまわしてとぶ。
- ③ 波 — 前後に地面に波を作ってとぶ。
- ④ 縄とび競争 — 走り競争をしたり、たくさんとぶ競争をする。
- ⑤ 縄を二つに折って右手に持ち、地面に平行に足の下を廻してとぶ。
- ⑥ 縄の一端を柱か立木にしばり、一端を片手で廻したり大波小波をしてとぶ。

(2) 二人とび

① 一本の縄を二人で廻しながら交代にその場でとんだり、とびながら走ったりする。

(3) 三人以上

① ジャンケンで決めた二人が廻したり、大波小波をするのを仲間の者がとぶ。前からとびこんだり後からはいたり、大勢一緒に、または一人ずつ順番に数をきめてとぶ。

地面にお手玉を散らしておいて、とびながら拾ったりする。

② 一人が自分を中心にして地面を摺って円をかくように廻すのを皆がとぶ。

③ 縄とび競争——一人とびで走ったり、二人が廻して一人がとびながら走ったり、幾組かで競争する。

④ 二人で廻している所へ一人とびをしながら入ってとぶ。



石けりあそび



一、石——石けりに使う石は、平らでけりよさそうなもの又は店で買って来る、ガラスの平べたい石で中に色さまの模様が入っている。

二、場所——道路、校庭、草の植えていない空地

三、人数——三、四人が適當。

四、遊び方——線を引くために小枝の切れ端を持って来る。

(1) 大きさは場所によって自由。

① 各自の持石を並べてジャンケンをする。

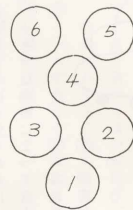
② 順番がきまったら、一から番号の順を追って石をけり、最後に一番上図の小さい丸にけり込む。

③ けった石が線の上で止まったり、外へ出た場合は一度休む。

④ 常に片足で立って、その立った足で石をけるのであって、若しあげた方の足を地につけたら「ダメ」になる。

⑤ 全部けり終ったら、又最初から始める。





(2)

(一) 順番をきめて①にけり入れる。

(二) ①へ石が入ったらまたいて両足をおろす。②、③と

片足でとんで入れて④に入ったらまたいて両足をおろす。

(三) ⑤、⑥に入れ④に戻って両足をまたいておろす。②

にきたとき、片足で立ったまま腰をかがめて自分の石

を拾って①をどび越えて出る。

(四) 次に石を②に投げいれて前のように⑥まで行っても

どる。

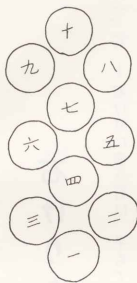
(五) 石を投げて予定の場所に入らなかったときは、次の

者と代わって何度でも入るまで投げる。⑥まで投げ入

れてけり戻ったら勝ち。

(3)

段々丸をふやし⑩までにすることもあ



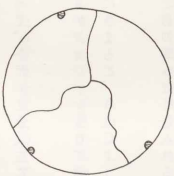
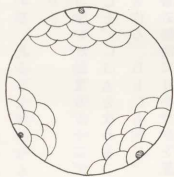
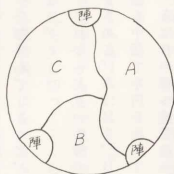
陣とりあそび

一、場所、校庭、お寺、お宮の境内

二、人数 三〜四人

三、遊び方

(1) 棒切れて地面に陣を画く、大きさは自由であるが、直径一メートル位。



(2)

ジャンケンで順を決める、出発の場所におはじきを置く。陣を画く時、それぞれ一番始めに画く所が大体自分の出発の場所になる。

- (3) 石を親指と人差指で隣の陣へはじき入れてその境の線を消し、次にまたその隣り、上下左右都合のよい場所へはじき入れてだんだん大きくする。はじいた時、線上に止ったらダメ、次の者の番になる。

- (4) 全部済んでしまうと、初め画いた小さな陣がなくなつて、全部が三分（三人の場合）してしまふ。

これからお互いの陣のとり合いが始まる。そこで三人がジャンケンをして誰が誰を攻めるかをさめる。AはBを、BはCを、CはAを攻めることにきまると、AはCより最も遠い所に親指を中指で半円を画いて陣を作る。BもCも同じ。

- (5) AはBの陣へ境界線の一番近い所にオハジキを置いてBの陣へはじき入れる。うまく入れば親指と中指で境から半円ずつ占領していく。一回すむと代る。はいらなかつたらそのまま次の者と代る。

- (6) 一人が占領されてしまうと、二人で勝負する。

植物であそぶもの

- 一、はおずき おおばこのはおずき

- 二、木の葉人形、どんぐりこま

- 三、松葉のくさり 松葉の一本をぬいて他の一本を曲げてぬいた所へさし込むと輪ができる。その輪の中へ次のを通し輪にして続けて鎖をつくる。その輪の中へ次のを通し輪にして続けて鎖をつくる。その輪の中へ次のを通し輪にして続けて鎖をつくる。長くつなぐことを競争したり、鎖を輪にして首飾りする。

- 四、ふくらます

- ① 百合の花びらを一枚どって、元の所は蜜があつて甘いのでなめて、それから両手で、軽くもんで口元を少し切つてふくらませる。

- ② そら豆の葉っぱを一枚ちぎつて、もんでやわらかくなつたら口元を少し切つてふくらませる。片方がうすいうすい膜状になる。

- 五、スッポン

- ① 山吹のくきのしんを抜いて、二、三センチに切つて、口にくわえてスッポン、スッポンと音をたて

て吸いこむ。

② 杉の実を口の中に入れておいて一粒ずつ笹の筒につめて、ピシッ、ピシッと打つ。
六、笹舟流し——笹舟を作って小川に流し走りくらべをする。おくれたり、芥にひっかかりたり、流れの瀬のゆるい所へ行くと後からの舟に当たらないように小石を投げて波紋を起し、早く流れるようにする。

七、柳の芽——白いやわらかい芽出しをちぎってネコといって、二つにも、三つにも分裂させ、両手の掌で軽くすると、細い銀色のきれいなしっぽが出てくる。

八、しゃみせんば——ペンペン草とかしゃみせんばなどかいて、白い花がすんて実が出来るとう耳の側でならして、かすかな音がする。

九、笛

① 柳の葉をくるくる巻いて一方をつぶし、そこを吹いて鳴らす。

② たんぼの軸を吹く。

③ 麦笛をならす——麦畑に行くと、黒穂といつて病気のついた真黒の穂があるのでそれを抜き取ってつくる。

④ からすえんどうのさやを聞いて中の実を少し元の形にして口の中に入れ、先を少し出して、吹いて鳴らす。

⑤ すまめのでつぼうの穂を抜いて吹く。

⑥ 端午の節句に、しょうぶの根元に近い赤味の部分を聞いて、吸って鳴らす。

⑦ 竹の管にゴム風船の破れた細いのを張り、吹いてならす、これにゴム風船をはめてふくらますと、風船の空気がぬけて、しほむときピーと鳴る。

⑧ いちようの口を石ですって小さな穴をあけ、針や釘で中をほじくり出してその口を吹いてならす。

十、押花——時期の花をつかう。特にたんぼ、山吹、桜、ぼたん、花しょうぶの花びらを教科書や、雑記帳に挟んで押花にする。

十一、押葉——紅葉した桜、いちよう、ホブラの葉を本の間にはさんで押葉にする。秋は黄、紅、まだらのきれいな葉を拾って木の葉人形をつくったり押葉にしたりする。

男児のあそび

昭和五十四年に発刊された「か、みがはらのむかし」を再読しますと、男の子の遊びについて何も載っていないので、私の子供時代を想い浮べながら稿を進めたいと思います。

昔の農家では小さい子供の頃から家業を手伝わされ遊びの日がとても楽しかった。村では田植えも終りお湿り（雨）が適度であるたびに総休みとか半日休みとか村の区長さんから布令が出ると、子供

は手伝いを止め大きな顔をして遊びに出る。そんな時の遊びを少し集録してみた。

水泳（水およぎ）今はどの学校にもプールが完備してあるが、以前は池とか小川で泳ぎ、大きい子供は木曾川まで出かけた。泳ぎ方も今の平泳ぎとは違って脚を上下にタバデンと動かして泳ぐが一番楽しい遊びであった。

魚採りもまた格別に面白く用水の小川で草笥を用い小魚をどり、あるいは石の下に隠れておるメソを木の股で作った押え木で突き差して捕える魚つりも楽しいもので主に池でつりをした。池では石投げの競争もして波飛びといって石をなるべく水平に投げ波の上をにっって一丁二丁三丁とその数の多い程上手である。

冬の頃になると、竹馬、庄家券、ゴマ廻し、釘遊び、芝めくり等々、色々の遊びに熱中し机の抽出しにはこれ等の遊び道具が一杯大切にしまっており、これ我が財宝なりと他人にさわらせない。

竹馬とは二メートル位の竹を二本用意しその竹の根元の方に脚を載せる台を縄でくくりつけたもので、その脚台の高さで上手下手を自慢するものである。支那では高馬として今でもお祭りの行事となり、テレビにも放映されている。

釘遊びは五寸釘を数本どこかでチョロまかし、地面に釘を突き差したものを他の子がすり剣式に地面に突き差しながら相手の釘を倒す遊びで多少危険であった。

庄家券は角形と丸形とあり、ボール紙の表に昔の武将の絵が貼り付けてあり、先着者が地面を平滑に均し、そこに一枚を貼りつけ次の者が自分の券であふり付けて勝負をする。又角形のものは貼りつ

けた絵の強い弱いで勝負するものである。

ゴマ廻しは今の子供達も遊んでいるので省略するが私達の頃はゴマの金具に太くて大きいものを用い相手のゴマの上にブツけて相手を壊すもので危険である。

その他十六将棋と云って地面に罫を画いた上に小石十六個を用い挟みとりをする。

陣取り遊びは野球に似た点があつて、基地になる立木を選びその基地から離れたものを捕える。もう六十年も昔のことで想い出しても細かいルールは忘れて書けない。

昔の子供のあそび



昔に比べて子供を取りまく世界は大きく変化しました。精巧なおモチャ、テレビ、ラジオ、テープレコーダー、現代っ子の囲りにあふれています。それでも子供は自分の環境から遊ぶ材料を探し出すものです。歩いている時、勉強している時でも囲りや机の上の道具など利用して、絶えずさまざまな遊びを見つけています。子供の遊びの中でもいろいろのことを体験して、身につけ、教室で学ぶこととは異った知恵を学んでいるようです。お母さん達が子供にオモチャを買って遊びを助長することもよいでしょうが、余り与えすぎると自分で遊びの材料を発見し、自分で遊びの方法を工夫するという大切な力を失なつて、創造力を伸ばすことが少ないように思えます。

子供が遊んでいるときはなるべく口を出すことなく、自由に遊ばせて、監視を怠らないことがよいようです。

さて主題の昔の遊びを二、三紹介しましょう。

一、釘さし

五寸釘を一本ずつ用意して二人で遊ぶ。濡った地面に十寸程の直線を引いて、ジャンケンで勝った者から直線をうすまき状に、とり囲む形に釘を打ちこみ、釘を立てた点と点の間を直線でつなぎ、釘が倒れたり、打ちこんだ点を直線でつなごうとしたら外の線と交差するときは失格し、次の番となる。次の番の者は空地の通路に釘を打ち込みながら外へ脱出しつつ、逆に相手をとりに囲むが途中で失格したら次の番と交替する。相手を囲んで自分の線上にビタリ釘を打ち込み、封鎖すると勝となる。

二、国どり

地面に大きく四角をかい、相対する角から国どりを始める。ジャンケンで勝った者は親指と人差し指をいっばいに開いて地面に円弧をかき、オハジキをはじいてその中に飛びこんだら何回でも繰り返えせる。失敗すれば次と交替する。国と国の境界線は残して国の中の線は消す。国の広さを競う。次々とジャンケンでその都度順番をきめて遊ぶ。

三、あやどり

両手にかけた紐の輪から指を使つてまず最初の形を造り、他の一人が異った形に指で直しながら自分の手に移す。これを繰りかえすのである。例えばまず川を作り次にたみ、亀の甲、魚たたみと順

々に作り最後に又川に戻るのである。

四、一人あやどり

自分一人で両手の指の糸をかけたリ、はずしたりして形を変えてゆく独り遊びである。カニ、ハシゴ、カメなど最後的に作るものと、終りなく続けるものと二通りある。

以上二ツ三ツぶつつけ本番でかいてみました。明治の青年男女を問わずに経験あると思います。

当時を思うとき、運道具らしいものもなく、だから教わることもなく、見よう見まねに覚える当時をうかがえます。

あとがき

「むかし」第二集を発刊するにあたり、思うように原稿が集まらなく、心配しておりましたが、どうか発刊の運びとなりました。

大学院の皆さんの手により、古くから伝えられてきた遊び、うた、伝承技術、ふるさとのなれことばなど、後世に残し伝えたいとの願いをこめてまとめました。

本当に不十分ですが第一集につきご愛読くだされば幸いと存じます。

むかし 第二集

編集 各務原市高齢者大学院生一同
発行 各務原市教育委員会
発行日 昭和五十五年三月

新編 日本書紀

新編 日本書紀

新編 日本書紀

新編 日本書紀

新編 日本書紀

新編 日本書紀

新編 日本書紀

新編 日本書紀

新編 日本書紀

新編 日本書紀

吉林省图书馆



13915359

